

を出發しました。春のうららかな日でした。

「知らぬ他國の古市や、弥陀の仏に導かれ、清き流れの番近川、下る我が身の行末を、護る龍護寺親世者、古におろかみこぎ行け成、塩焼く浜のありと云ふ、小手を分ざせ成沖の方、霞みてしかと見えぬとも、見えぬ古更しのびるる、大江の灘を望みつつ、こゝ蛇崎の鼻をれば、堅田の里もほど近し。馬手に見ゆるは城八幡、南無や八幡大菩薩、武運つたなき一糸の、再興給へと念じつつ、柝手打つて相江の、港に祀る熊野社を、はるかに祥し潜ぎ上る、嘉吉の歳の頃とかや、周防の國の大内勢、三百余艘の水軍は、佐伯の氏を攻めんとて、潮の如くよせ来る、宇山の城の見ゆるなり。この時佐伯惟世は、たてをもちて水軍を、堅田の海に追い落す、磯波の物語、さきつへ上る大越の、川口近き汐月村、汐の満ちたる岸辺に着きにけり。」

上陸した一行は、近くの百姓八頭の白井に一体必し道案内させました。阿弥陀如来を先頭に陣道つたいに長蛇の列を作り、汐月の鎮守の森にはいつて行きました。今の長良神社で、佐伯十二社の内の一社に参拜し、佐伯氏族の居館上の台の裏道を登り、岸河内峠に消えて行きました。

峠を下れば岸河内の鍛冶屋村、大越川を渡って津留の地村、観音崎と越水成上屋村の金剛寺につきまします。和尙に迎えられた一行は、阿弥陀仏を手に納め右のてありまします。

ぬけから(蛇)は尾長良権現として祀る、仏と神と蛇とがらませた神祕な物語りが生まれる。まさに傑作であります。(白井家に伝わる万世道案内のお札として兼定卿より賜わつたもので、今は紛失してありません。)

其の後問もなく大友宗麟の寺社取つぶしのお觸が出て軍兵に打ちこわされ、仏は難をのがれ津留の地の大願寺に祀られました。天正十四年(一六二九年)十一月四日陸軍は岸河内に進入し焼打の戦火にかかり、阿弥陀如来は、大越川に投ずこまれました。この時御手の一部を破壊し、後修理したとのことであります。拾われて白井の家に一時難をさけましたか、潮谷寺に迎えられて高畑に行き、四代登壇上人が現在の潮谷寺に迎えて本尊として安置したのであります。

さて兼定卿は宗麟に呼ばれて白井に行きました。女婿のため新館が建てられ、御扶持を給して住居させ、土佐に残した夫人も宗麟の討らいて柴田次右衛門尉を便として、姫居もろとも白井へ迎えられました。

兼定卿の白井に於ける生活を大友興隆記は次のように書いてあります。

海辺の旅宿の御住居、つれづれの折極は昔を思召し出され、岩に砕くる波と共に御心を砕き給ひ、又或時は汀の松に言問ふ風のたむく日は、片萩枕の夢を醒まし、憂きを忘れまほしき折からは、歌をよみ詩を作り日を送り給ふ。斯くある所に如何なるかたこと云ひやはみけん

一でうやつくりたてたる致ぶすま
やぶれ果つればこよめきませす

大友宗麟は永祿六年に丹生城を築かせ、九年宗麟と号

